

博士論文要旨

佐多稲子の戦中・戦後の文学 —外地・在日・原爆・闇市の女性表象—

城西国際大学大学院人文科学研究科
比較文化専攻 伊原 美好

研究目的

佐多稲子は、日本近代の激動期つまり満州事変・日中戦争開戦から第二次世界大戦終結、そして連合軍による占領の時代と、いわゆる「戦争の時代」を文字どおり生きた作家である。1904(明治37)年に生まれ、1998(平成10)年に死去した佐多稲子の同時代を共に生きた人々を見つめ表象化した文学は、日本近代の陰影をそのままを映し出し、その意味で時代の記憶の証言者となっているといえる。

本論は、日本近代の激動期を見据えながら佐多稲子が表象した女性像を検討するものである。これまで佐多稲子研究においては、作品の執筆時あるいは描かれた時代との関連で追究され、大局的な「時代の流れ」の中で解読されてこなかった。従ってここでは、佐多稲子の女性表象を「時代」の中に置き直し語りなおすことによって、新たな地平から「今」の私たちに問いかけているものを、又、「未来」に向けての「時代の語り直し」を考えた。

日本は明治維新後、西欧列強国に追いつくため、脱亜入欧精神で強力な欧米化を進め近代化に邁進した。天皇制近代国家となった帝国日本は、富国強兵・殖産興業と、西欧列強の植民地政策に追随した帝国主義的植民地支配を実行し、その結果、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦を経て大陸進出を図る中、台湾・朝鮮・関東州・南洋諸島などのアジア各地を「植民地」あるいは「半植民地」として支配した。満州事変や日中戦争さらに太平洋戦争を引き起こし、大東亜共栄圏や八紘一字を掲げて獲得した植民地・半植民地の人々をも含めて徹底的に皇民化教育を行った。このような時代に、日本帝国の植民地侵略政策に巻き込まれて生きた女性たちに視点を置く佐多稲子の作品『分身』『重き流れに』や、敗戦後の日本を描出する『風になじんだ歌』及び『樹影』から、この時代を「重き流れの時代」と捉え、人々は如何に生き、生き延びたのかを見つめ、さらにその時代が、現在を生きる私たちにどのような問いを投げかけているのかを改めて問い直そうとするものである。分析した佐多稲子の4作品は、辺見庸が『完全版1★9★3★7』(角川文庫2016・11・25)で述べているように、過去の出来事つまり歴史は、「未来に過去がやってくる」ことをまざまざと伝えていると考えるからである。

本論の構成

本論で取り上げた4作品には、満州事変以前から日中戦争、第二次世界大戦をへて、敗戦を迎え、戦後を生きぬく女たちが抱き続けたトラウマの記憶が表象化されている。プロレタリア作家として出発して以来、佐多稲子は戦争・貧困・階級格差・性差さらに民族問題等に視点を据え、一貫して女たちの「語りえぬもの」、「語ってこなかったもの」に耳を澄まし、その声を聞き取っている。そうすることで、村上陽子が『出来事の残響—原爆文学と沖縄文学』¹で指摘しているように、「破壊的な出来事の底には、証言の主体となることができない多くの存在が沈んでいる。その存在が発する呻きや泣き声、叫び、骨がこすれ合って生ずるかすかな音」をも聞き取ることができるからである。それを視座として、佐多が視点化した人物に向き合い「証言の主体となることが出来ない多くの存在」の「語ってこなかったもの」を追ってみた。

本論は、佐多稲子の4作品『分身』『重き流れに』『風になじんだ歌』及び『樹影』を取り上げて考察し、序章と終章を布置している。目次・構成は以下の通りである。

序 章

第一章 居場所を求めて

—『分身』にみる日中混血少女の心の闇

- 第1節 はじめに
- 第2節 日中戦争と「混血」という問題
- 第3節 母の「沈黙」と子供への「鬼子」感覚
- 第4節 「蒟蒻」という自己意識と自殺の反復
- 第5節 「分身」—初出とテキストとの異同から見えてくるもの

第二章 「外地と引揚げ」時代の記憶

—『重き流れに』にみる〈満州〉

- 第1節 はじめに
- 第2節 モチーフの探求—創作ノートを中心に
- 第3節 異郷の地「満州」への「移動」
 - 3-1 大陸に賭けた男の「夢」と挫折
 - 3-2 〈妻〉の怨念と抵抗の物語
- 第4節 〈満州〉を生き延びる女性群像
 - 4-1 満州への進出と女たち
 - 〈性〉の移動とジェンダー
 - 4-2 もうひとつの孤独な女たちの物語
 - 4-3 哈爾濱に生きる様々な群像

¹ 村上陽子『出来事の残響—原爆文学と沖縄文学』（インパクト出版会 2,015・7）

第5節 引揚げの道―「帰郷」と「再生」

- 5-1 引揚げの開始
- 5-2 生き延びた母の再生
- 5-3 「満州っ子」二世の出発

第三章 闇市のマリア

―『風になじんだ歌』にみる戦後の焼け跡からの出発

第1節 焼け跡からの出発

- 1-1 空襲という暴力
- 1-2 闇市という「場」
- 1-3 「パンパン」と呼ばれた娼婦たち
- 1-4 戦争が生んだ「浮浪児」たち

第2節 闇市のマリアという存在

第3節 闇市から「紡がれた」ひとつの戦後史

第四章 被爆と在日の狭間で

―『樹影』にみる敗戦後の〈ナガサキ〉

第1節 はじめに

第2節 「在日」という問題―在日華僑家族の絆・父と娘の物語

第3節 女たちの痛みと沈黙

第4節 内部被爆者の苦悩―原爆という暴力

第5節 おわりに

終章

添付資料

参考文献と資料

日本帝国がいわゆる「外地」に進出する中で、中国や朝鮮等の他民族間交流から新しい異文化を生み、新しい生活スタイルを生んだ。同時に多くの悲劇をもたらした。『分身』には、その中で生まれた「混血」という問題に翻弄された少女の心の「闇」が表出されている。又、『重き流れに』には、時代を見据えて獲得した豊かな生活と国内の法律や思想からも解放され自由を得た新天地「満洲」で、親族もいない妻と野心家の夫だけに頼るしかできない生活の中で営まれた夫婦の相克、さらに、敗戦が引き起こした「引揚げ」という惨事に立ち会った女性の記憶が表象されている。『風になじんだ歌』には、空襲で焦土と化した都市空間で生きるために泥にまみれ「いのち」を生き延びた女たちの記憶、さらに『樹影』では、民族と原爆のトラウマの中で〈ナガサキ〉という「外地」で生き延びた華僑の

女性や彼女を取り巻く人々と向き合っている。そして、深層にためこまれた女たちの「語りえぬもの」、「語ってこなかった」ものから聞こえる「出来事の記憶」を、佐多稲子は作品の中に語り直している。その語り直しから、キャシー・カルース²のいう「自分の過去の出来事に繋がった個人の物語としてではなく、他者のトラウマに自分のトラウマが結び付けられる様子」を考え、「他者の傷に耳を傾ける可能性と驚きを通して、他者との出会いへと道が繋がっていく」事が可能であろう。作品の中の「トラウマ」に向き合う事で、「反復される声なき苦しみをもたらす沈黙」つまり「傷と声」に耳を澄まし聞き取る事にこそ意味があると思われる。

他者の「傷と声」に耳を澄まし聞き取る事は、水田宗子が指摘しているように「他者の苦悩の痕跡＝記憶の共有は鎮魂の行為となるが、同時にそのことを通して人は自らのいのちを生き延びることができる」³のであると考える。つまり、表象された作品の中の女たちの記憶に向き合い、読者が記憶を再生産する行為の中で、他者の記憶を共有し「人は自らのいのちを生き延びる」事が可能と考えるからである。

又、ジョン・W・ダワーは戦争の記憶について、「どんなテーマであれ、『日本』とか『日本人』、あるいは日本文化、日本社会といったふうに、あたかもすべてが均質で同一であるかのように語るのは、愚かなことだ。これは原爆がどう記憶されたのか、という問題にもあてはまる。広島と長崎について、一枚岩のようのような記憶のしかたはない」⁴と指摘しているが、確かに、他者の記憶も均一でもないし一枚岩でもない。時代の流れの中で、記憶は作者の思想と体験と共に変遷して行く。従って、その変遷の中で戦争の記憶の置きなおしを考えることこそ重要であろう。時代の記憶の表象を、作品の内面から探究することで、「置き去りにしてきた他者の記憶」または「忘れ去られていた記憶」に出会える。その出会えた他者の時代の記憶から、「今」を生きる自分自身の問題として何が言えるのであろうかを考察した。

この問題を上記の理論や文献を踏まえ、満州事変にはじまる植民地侵略戦争から敗戦そして戦後の米国占領下の時代の歴史に焦点を置き、時代のトラウマの記憶の再生を、その時代を表象化した佐多稲子の文学の中で考察した。

第一章『分身』では、日中戦争の時代に、日中混血の女性の居場所探しと、母の国と父の国のどちらの民族にも属せない分裂する意識を、掴みどころのない「蒺藜」というメタファーを駆使して、アイデンティティを模索する女性の苦悩を表出している。フランツ・ファノンが『黒い皮膚、白い仮面』⁵に、「人間は自分を他の人間に認知させるために、み

² キャシー・カルース著 下河辺美知子訳『トラウマ・歴史・物語 持ち主なき出来事』(みすず書房 2005・1・28)

キャシー・カルース編 下河辺美知子監訳『トラウマへの探究 証言の不可能性と可能性』(作品社 2000・5・20)

³ 水田宗子『大庭みな子 記憶の文学』(平凡社 2013・3)

⁴ ジョン・W・ダワー 外岡秀俊訳 『忘却のしかた、記憶のしかた 日本・アメリカ・戦争』(岩波書店 2013・8)

⁵ フランツ・ファノン 海老坂武・加藤晴久訳 『黒い皮膚、白い仮面』 (みすず書房 1998)

ずからを他者に強制しようとする、(略) 他者によって実際に認知されない間は、この他者が彼の行動のテーマであり続けると述べているが、アイデンティティを求め仮面をつけて他者の間に生き延びる「場」を求め自殺を繰り返しながら彷徨する女性の心の「闇」を分析した。

第二章『重き流れに』から、日中戦争の時代に帝国主義が構築した「満洲」という「外地」に越境し、生き延びた女たちの記憶、女たちの「語り」を追究した。

明治の終わり頃、数え 16 歳で野心家の実業家に嫁いだ幼妻が、日本を離れて異郷の地「満洲」に渡り、「妾」を持つことを当然とする男の生き方に直面し約 25 年間にわたって孤閨を貫き「家庭内別居」で抵抗した妻の孤独を中心に、男たちが必要とした「芸酌婦」等の「性産業」という職業領域の女たちに視点を置く。さらに帝国の崩壊の混乱時に経済戦犯として銃殺された実業家の生き様と、「引揚げ」を経験しながらも、逞しく再生するその妻と娘たちの〈生〉を考察した。同時に、日本帝国が作った「外地」に生きる女たちの加害者及び被害者としての記憶の陰影をも探査する。そして、ジョン・W・ダワー⁶が戦争の記憶について、戦後『歴史』が『記憶』としてどのように操作され、社会にひろまるのかを分析したが、佐多稲子が、戦争という重き流れの時代を経験し生きた女たちに、その経験と記憶をどのように語らせたのかを探査した。

第三章『風になじんだ歌』では、敗戦後の混乱した新宿の街にいち早く形成された「闇市」で居酒屋を経営して生きるマダムと、そのマダムを取り巻く「娼婦」をはじめ彷徨する女たちを追跡した。なぜなら「闇市」という制度や規範からも逸脱したいわば「外地」に立ち、泥まみれになりながら闇市を生活の場として、底辺の女たちと共に「山姥」⁷的存在として生き抜いた「闇市」のマリアの記憶⁸と、彼女を取り巻く人々の戦後史の表象であると言えるからである。

作品に描かれた女たちは、「闇市」に紛れ込み、男を頼らず自分の境遇を受け入れ「身ひとつ」で稼ぎ、人々に救いの手を差し伸べる闇市の「マダム」の温かくそして毅然とした背中を見ながら、「悲しさと逞しさにあふれた」姿が切り取られ、その姿は映像のように活写されている。闇市に生きる「マダム」もまた「ここに生きている女たちと同じ思い」で、喧嘩の仲裁、警察からの女たちのもらい下げや、食事等を提供しながら毎日の喧騒の中にいた。その姿は、丸ごと相談引き受け屋「よろず相談所」を開設して、いわば「肝っ玉母さん」⁹の姿をも呈していた。それは、闇市の片隅に生きる人々の母でもあり、ある意味で泥にまみれた「聖母マリア」のような存在でもあった。新宿の「闇市」に根を下ろし、素足のまま「下駄」を履き大地をしっかりと踏みしめ、着物に「割烹着」をはおり毎日を生活

⁶ ジョン・W・ダワー 外岡秀俊訳 『忘却のしかた、記憶のしかた 日本・アメリカ・戦争』(岩波書店 2013・8)

⁷ 水田宗子・北田幸恵編『女性の原型と語りなおし 山姥たちの物語』(學藝書房 2002・2)

⁸ 岡真理『(思考のフロンティア) 記憶/物語』(岩波書房、2000・2)の中で、「〈出来事は、まず語られねばならない。伝えられねばならない。〈出来事〉の記憶は他者と共有されねばならない」と述べている。

⁹ プレヒト岩淵達治訳『肝っ玉おっ母とその子供たち』(岩波文庫 2004・4・16)

したマダムの姿は、まさに「闇市」の中で「命」を「生きる」メタファーとして立ち上がり、「闇市」のマリア的存在となっていると考えた。「闇市」は「いのち」を生き延びるための「場」であったからである。

「闇市」とは何であったのか、又、「闇市」の象徴的存在であった「闇市」のマリアの生き方から「今」も繰り返される戦争の時代への語り直しを読む。

第四章『樹影』では、レイシズムの中で「在日」すなわち「民族」問題を背負って、長崎という「異郷」で生きる華僑の女性と女性を取り巻く人々を、〈ナガサキ〉という〈トボス〉を視座として、ジェンダーの視点で追究する。

「在日」すなわち「民族」の問題と〈ナガサキ〉の原爆問題を視座として作品を解説した。日本という「外地」すなわち長崎で生きる華僑の女性に視点を置き、妻子ある画家との愛の煩悶を中心に、内部被爆への恐怖や民族問題の狭間で苦しむ女性と、夫の愛を喪失した妻の苦悩を分析した。そして、それぞれの女性の精神的「旅立ち」を画家が表出した「画」と、華僑の女性が経営する茶房「茉莉花」から聞こえる民族音楽をメタファーとして追究した。さらに、日中戦争の時代から長崎を居場所とせざるを得なかった父を頂点とする華僑家族を、戦時中は日本国からの出国も制限され、さらに職を求めて日本に越境し長い時間の経過から中国福建省という故郷をも喪失した流浪する民として、ポストコロニアルな視点から論ずる。又、日本という「外地」に生きる華僑の「父と娘」の表出から、正確に語ることも理解することも出来ない片言の日本語の「父の語り」から浮き上がるレイシズムの中の「華僑の父と娘」の物語を読む。また華僑の女性は日本人男性との愛の関係によって深層にため込んでいた民族意識に目覚め、精神式的に「独り立ち」する姿を読むことになった。

加えて、村上陽子¹⁰がいう「出来事の後には書かれた文学を読むことは、言葉を通して他者の体験を生き、言葉にならない残響としての呼びかけを聞き取ることにほかならない。それは過去ではなく、未来に向けた作業のように思われる」という視点をも見据え、本論で取り上げた「時代」のなかの「語りえぬもの」あるいは「語ってこなかった」女たちの「傷と声」を聞いた。そうすることによって、女たちの時代の記憶に向き合った4作品の中から、日本の近代の激動期に生き延びた人々の姿を表出した佐多稲子の「時代の証言者」としての姿が立ち上がってきた。そして、「今」の私たちに問いかけているものを、又、「未来」に向けて問いかけるものをも考察できたと思う。

結論

本論では「時代」という視点から佐多稲子の戦中・戦後の4作品を取り上げた。

『分身』では、日中戦争の時代を見据え、その中で生きた日中混血の少女の心の「闇」を、『重き流れに』では新天地満州に移動した多くの人々の姿について考察した。『風になじんだ歌』では敗戦後の混乱期、闇市に生きる人々を、『樹影』では原爆と在日すなわち民

¹⁰ 村上陽子『出来事の残響—原爆文学と沖縄文学』（インパクト出版会 2,015・7）

族問題さらに婚外恋愛に煩悶する男女の姿を中心に、苦悩を抱えて生きる多くの人々を「時代」の中で探査した。

特に佐多稲子が表象した女性像、つまり『分身』の日中混血の娘・レンと母・お杉、『重き流れに』の妻・尚子と妾・喜代松、『風になじんだ歌』の闇市のマリア的存在・志保、そして『樹影』の在日中国人女性・慶子と画家の妻・邦子を追跡した。いずれも帝国日本がしかけた戦争の時代から敗戦後の「重き流れの時代」を、「嘆きに舞いながら」もそれぞれの立場で抱えた深層の〈闇〉と〈傷痕〉に向き合いながら、〈生〉を生き抜いたことを見てきた。佐多は彼女たちの「つぶやき」に耳を澄ましその残響を表現したが、その事は、村上陽子¹¹が示唆する「出来事の後に書かれた文学を読むことは、言葉を通して他者の体験を生き、言葉にならない残響としての呼びかけを聞き取ることにほかならない。それは過去ではなく、未来に向けた作業のように思われる」という視座と重なると思われる。従って、本論で取り上げた作品の「時代」の「残響」から、「今」の私たちに問いかけているものを、又、「未来」に向けての「時代の語り直し」を考える事になった。

長谷川啓¹²は、「日本の近代作家の多くが、革命運動への挫折や失望の中からこそすぐれた文学を生み出したように、『塑像』事件以後の佐多稲子もまた、文学の世界でたったひとりの闘いに挑んでいるようにみうけられる。〈略〉ここに描かれているのは、それぞれ傷痕を抱え孤独に閉ざされて生きてきた、あるいは死んでいった人たちである。戦前はもとより戦後の日本を生きた人々の姿を、作者はそのようなものとして見据えている。戦後民主主義の終焉の時代にあたって、佐多稲子は時代の証言として、この事実を執拗に追いつづけることに、作家的情熱を傾けているようだ。しかもこれまで以上に歴史意識を強め、人間の存在というものを、歴史的状況の中で把握し直そうとしている」と述べている。

この佐多稲子が執拗に追って表現した「時代」に「こけつまるびつ」しながら生きてきた私たちの記憶の残響は、戦前的様相を見せ始めている今日、21世紀に生きる者たちへの警鐘と問いかけとなって蘇ってくる。新自由主義が提唱される現在、グローバリゼーションはますますコントロール不能な格差社会を生み、富の再分配も機能していない状況にある。又、原発問題に対する日本の政策は、人や環境を使い捨てにし、人間の生存をも脅かし環境破壊をも容認しているかに見える。加えて、ヘイトスピーチやレイシズム等の民族差別の問題も生じてきている現在、一層佐多稲子が語るこの歴史の証言者の声に傾注することに意味があろう。その結果、「戦争の出来る国」へと進む現在の日本の危機的な状況の中に生きる私は、人間の存在の重要性を「今、表現すること」、「今、書いておかねば」と発信する佐多稲子の「つぶやき」と「気概」を改めて発見する事になった。

さらに佐多稲子は、一貫して逞しく〈生〉を生き延びることを希求する市井の人々にエールを送る文学を紡いだことも確認した。

従って、いわゆる「戦争の時代」を文字どおり生きた佐多稲子の同時代を共に生きた人々

¹¹ 村上陽子『出来事の残響—原爆文学と沖縄文学』（インパクト出版会 2015・7）

¹² 佐多稲子全集第15巻 月報15「解題〈美しい時間〉への挽歌」（講談社 1979・2）

を見つめ表象化した文学は、日本近代の陰影をそのままを映し出し、その意味で時代の記憶の証言者となって立ち上がってきたことをみてきた。その過去の重き「戦争の時代」の証言から、「戦争の出来る国」へ向かう「現在」へ、さらに「未来」へ投げかける危機的状況への喫緊の警告を読むことになった。